

## 裏山は高山植物園のよう(青海省玉樹、街歩き)

佐々木 健之

2018年7月、四川省に住む大川健三さんが企画した、黄河源流を目指す旅に参加した。黄河源流は、日本で見たTV番組だと「星宿海」という池塘が源流だと紹介していた。そこまで行くのはかなり大変そう。今回の旅で、どこまで行けるだろうか？

7月7日、成都から最初の目的地丹巴へは路線バスで行く。バスに乗るのも大変で、検問用の改札があり、パスポートの提示を求められた。荷物も安全確認があって、飛行場にあるようなベルトコンベヤーに荷物を入れて安全確認された。

成都のバスターミナルは各地への路線バスが櫛形に駐車して初めての人は迷子になりそう。我々は大川さんの先導があるので無事、丹巴行バスに乗った。大川さんの配慮で座席を人数分より多く予約してあった。そのため二人掛けを一人で使えた。長旅なので窮屈さがなくありがたい。私が丹巴へ行くのは2012年以来、6年ぶりだ。

丹巴からは現地で乗用車2台を雇って行く。運転手を入れて総勢9人。7月8日7時30分出発。車に揺られていくつかの山河を越え、7月9日夕方、青海省の「玉樹」という街に着いた。玉樹は四川省から入った場合、省境の高い峠(このあたりの高山植物の撮影も旅の目的の一つだった)を越えたところにある。私は青海省が初めだったが、「玉樹」という名前だけは知っていた。青海省という印象から、勝手な思い込みで玉樹は砂漠にある埃っぽい街と思っていた。着いてみると玉樹は、草原の緩やかな山に囲まれた谷間街だった。ここは交通の要衝地でウィキペ

ディアトによると、人口は8万(中国語版では12万)と大きな街だ。

標高が3700mくらいの高地なので、玉樹を囲む山は森林は育たない。帰国してから調べて分かったのだが、2010年に玉樹付近を震源とする「青海地震」があって死者2698人と、深刻な被害を受けたようだ。予備知識がなかったこともあるが、市街地では地震の痕跡は分からなかった。

玉樹市街中心まで入って、今晚泊まるホテルを決め、すぐにパスポートを集めて宿泊手続きを済ませる。すでに夕食時間なので、ホテルそばの食堂「四川川味砂鍋店」に入った。運転手が推挙して入るところは、たいがい「四川風味」食堂だ。四川人は食べ物に対して保守的なのかな？この時は石鍋に入った石焼き麺を食べた。

作り方を見ていると、厨房で九つの石鍋を一度にコンロにかけて盛大に加熱している。石鍋が炎上しているようだ。従ってできあがりも一度にできる。極太の麺は春雨らしい。スープは塩味、トッピングはヤクの肉。ヤクの肉は硬い。腹が空いているので結構うまい。

壁に市当局の掲示板があり、営業許可証などとともに「年度(去年のことか)食品安全等級」という決定済みのランク付けの記載があった。上から[A好]、[B良好]、[C一般]のうち、この店は最下位のCだそうで、DやEは無いのでまあ良しと思った。

夕食を済ませると、食堂前で「今日はここで解散」となった。ほとんどの人はホテルに戻る。時刻は午後8時近いのにまだ明るい。



玉樹の四川風味の食堂は9人分の石鍋を一度に着火した。(中)はできあがり。(右)はランク付け掲示



黄河源流に近い扎陵湖。大川さんの予想では、将来は管理された公園になる可能性大。人物は若い運転手の楊さん

私は通りに出て、通りかかったタクシーを捕まえた。

時間を少し遡ってこの日の18時ごろ、玉樹のホテル駐車場で車を降りたときに近くの小山が見えた。それは市街のすぐ後ろから立ち上がり、頂上には柵をめぐらせた展望台付らしいものがある。尾根は遊歩道になってるのか人が歩いているのが見えた。高さはおよそ200mちょっとかな(その時は)と踏んだ。

夕食後、その展望台行ってみたかった。だが歩いて行くと日没になってしまうだろう、しかしタクシーなら5～10分くらいだ。きっと山を登る車道があると思った。そんなわけでタクシーを捕まえたのだ。

タクシーに乗り込むと、窓越しに「あの山へ行って」と指さした。30歳台くらいの運転手は最初は怪訝顔だったがすぐに理解して走り出す。街はずれになると民家が続く狭い谷に入った。次に枝道に入るとすぐに蛇行する山道になり、あっという間に目的の山上駐車場に到着した。

運転手に待つようにいい(通じたかどうか分からない)、帰らないよう料金を払わないで車を降りる。そして「見晴し台」へ続く遊歩道の階段を登った。

遊歩道は木道で、円形の展望台に続いていた。もう夕暮れで玉樹の街が夕闇に沈むところだ。乾いた感触のコンクリートの建物が立ち並ぶ。それが夕日に沈むありさまは、まさに異国の街だった。

展望台の先端まで急ぎ足で行き、街並みの写真を撮る。山腹をのぞき込むと、下の道路から一直線に登ってくる踏み跡があった。これなら使えそうだ。

駐車場へと戻り始めると、タクシーの運転手が登ってきて、彼もしきりとスマホで景色を撮っている。ここに来たことが無いのか？

おおむね小山の様子が多かったの、ホテルへ帰る

ことに。車に乗り込み、運転手にホテルのカードを見せて(住所と電話番号が記載してあるドアキー兼用のカード)、「ここ」と示したが困惑の表情を見せた。え！もしかして字が読めないの？ …どうも読めないらしい。しかし運転免許試験とか、スマホのメールなどはどうするの？ しかし現実はそのような人がいるのだから仕方ない。

街まで下ったところで、角ごとに「右」とか「左」とか声を出して誘導し、適当なところで降りてもらった。料金を訊くと20元だという。350円くらいか。これで待ち時間込みでは気の毒なので30元払って、ホテルまで歩いて帰った。

明けて7月10日は黄河源流へ行った。早朝の暗い玉樹の街を出発、最初は高速道路を使って快適に飛ばした。山あいをトンネルと橋梁で抜けると、起伏のない高原となり、平行して一般道も通っている。隣の一般道にはトラックが疾走している。こちらの高速道とほとんど同じ速さだ。何のための高速道路か？

おまけに、この高速道路は、とんでもない作り方で、明らかにところどころ波打っている。波打ち部分に入ると、後部座席は、激しく上下に叩きつけられて痛い。運転手はそれなりに注意し、問題箇所ですぐ徐行するのだが、はっと気がつく前に突っ込んでしまうこともある。車の構造も関係するのだろうが、特に後部座席はクッションが悪く、臀部に直に響いた。高速道路は3年前に作ったばかりだそう。基礎工事が駄目なのか、標高3000mを越えた高地なので、凍結、融解を繰り返して地盤沈下となったか。

高速道路ではないが、道路に敷いて車両を徐行させるギザギザの板がある。道路工事現場や、政府建物の前後に敷設してある、強制徐行装置と呼びたい。ここを通過するときかなり激しく振動する。ゆっくりでも



残照の玉樹の市街。当代山見晴台から



高山植物の一部。裏山の花とは思えないほど見事だ。



山道の途中から俯瞰した市街。手前に高山植物がある。

だ。救急車で病人を搬送したら振動で悪化するだろう。中国的な仕掛けだと思った。

黄河源流へのドライブは、予想より遠かったの、ほぼ源流のちょっと手前の「<sup>チョーリン</sup>扎陵湖」という美しい湖で引き返した。

帰り道は、眠気と戦う運転手を鼓舞して、夜の12時近くに再び玉樹に帰り着いた。残業8時間分くらい運転した勘定だ。連泊で同じホテル「喜馬拉雅大酒店」に泊まった。この時は運転手も大変だったが、乗っている我々も疲れた。

明けて7月11日、明るくなるのを待って6時過ぎホテルを出た。主要街道を横切って再び展望台のある小山に向かった。タクシーで行ったときには気づかなかったが入り口に「当代山現景平台」という看板があった。この山の案内板である。今度は歩いて登るつもりで、当たりを付けた民家の脇から踏み跡をたどる。人糞らしきものも地面にあるので油断ならない。犬、吠えかかっ

て牙をむく犬が現れないように願う。人家のあるところを過ぎ、土手を越え、草むらから斜面に取り付いた。少し登るとはっきりした山道になってひと安心。枝道があるものの山頂へ続いている。

足下を見れば開花した高山植物の盛りだった。カメラをとりだし、ここそと現れる花々を撮影しながら、尾根を登っていった。玉樹は3700mの高地なので空気が薄く、ちょっとの坂道で息切れがする。休み休み撮影して登るのがちょうどよい。

標高差200m位の小山と思ったが、帰国してからグーグルアースで確かめると、なんだ標高差100mしかなかった。しかし、ゆっくり登ったせいで上まで50分ほどかかった。ようやく展望台の柵まで登り着いた。この山道は、公認された登山道ではなく、勝手に人が入り込んでできた道のような。柵と遊歩道とは遮断されている。山の上は駐車場側から延びる遊歩道の終点で、円形の広場となっていた。

ここまで来たことに満足して、帰ることにした。登りより下りの方が滑るので危ない。

植物の写真は下りだと角度が変わってそれなりに撮影意欲が湧く。景色を楽しみながら、ゆっくり下る。一部岩場のような所があったが問題なく降りた。登った道と少し違うが、直接道路に降りる道をとった。斜面最後の所は土手の上に金網があって、向こう側の道路に降りられない。幸い人が通った破れた箇所がありそこまで迂回する。そして散歩の途中ですよといった素知らぬ顔を作り、道路に降り立った。

ホテル前での集合時刻にはまだすこし間があるので、玉樹の街を散歩することにした。歩道を歩いていると、向こうから歩いてくる運転手の鄧さんに出会った。彼も散歩中らしい。やあやあと大げさに挨拶をしてから、私は左側にある登ったばかりの山を指さし、「あすこへ行ったよ」と身振りで伝えた。

鄧さんと別れると、ホテル前を通り過ぎて、回教的な臭いのする一角に入った。絨毯屋さんとか、遊牧民用らしきテント屋さんがあった。テント屋さんの壁にはテント見本の写真がありいろいろな種類があるものだと感心した。

以上、早起き散歩散文でした。